
神様に召喚されて勇者っぽくがんばってみた

れもんぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様に召喚されて勇者っぽくがんばってみた

【Nコード】

N1961BA

【作者名】

れもんぐみ

【あらすじ】

何気にリア充な高校生がとある神様(?)に異世界に召喚されて、しかも「世界を救え」って。しかたなく召喚に応じるが、わかることは二つ。異世界に召喚されたってことと、召喚の時に一振りの刀を渡されたってこと。そんな中がんばって成長していく一人の勇者(?)の物語。

初めて書いてみた上に、文章が苦手な人が書いているので誤字脱字、読みにくい、何を言っているかわからない、そんなところが多々あると思いますが、ご指摘等宜しく願います。

残酷な描写とかはまだ書くかまだわかりませんが、気づいたら書いてたりするので一応です。

プロローグ（前書き）

初めまして。不慣れですが宜しくお願いします。

練習として書かせて頂いてる為御読み苦しいかと思いますが、御読みいただいた方はご指摘等ありましたら、よろしくお願いします。

ブローグ

「ふわあああ、朝かあ」

眠い目を擦りながら、しぶしぶ起きる。

今は朝の6時半。俺は朝に弱い。だから、今もギリギリだ。

「さて、行きますか。」

一人暮らしだから、朝飯もそこに家を出た。

まだ外にはほとんどいない。人づきあいが苦手な俺には好都合だ。

———と思ったらいた。一番会いたくない人だ。

町内会の一番偉い人？らしい。俺には関係ない人だけど、怖いので挨拶しとく。

「こんにちは」

さっそく睨まれた。

「こんにちは、今日は早いねえ。彼女とデートお？そんなわけないわよねえ」

んー・・・残念ながらデートといえどデートなのだ。ただ、友達と行くから実質デートじゃないんだけど、二人つきりになればデートでも通じるだろう。だから、デート。あんたははずれだ。

ん？なんでこんなに早いかって？

そりゃ、遠くまで行くし、準備とかいろいろあるんだよ。

ここで、一応俺の自己紹介をしとこう。

俺は天弥^{あまやしん}刃。とある高校に通う一年生だ。

小学校中学校と剣道をやらされていたけど、今は独立というか家から逃げて一人暮らししている。

もちろん、剣道は続けているけど、習っているわけではない。基本的な型をまったく気にしないで自分に合う様に勝手に作って、やっている。型を気にしなければけっこう強いと思う。

そんなこんなで、自己紹介している間に待ち合わせの8時になった。今まで何してたのかは聞かないでくれ。

走って彼女が来た。時間ピッタリだ。

「ごめん。遅くなったあ。はあはあ・・・」

「わざわざ走って来なくていいのに。俺も今来たとこだから気にしないで。それに、今がちょうど待ち合わせの時間だよ?」

今来たのが俺の彼女、白羽^{はねゆづり}結織。同じ高校に通っている。

けっこうかわいい。なんでこんな彼女が俺にいいのか、半年経った今でも不思議なくらいだ。

家が神社で、たまに手伝いしている。

「行こ行こ」

早く行きたくてしょうがないらしい。

かわいすぎるからそれ以上体いっぱい使って気持ちを表現しないでくれ。

「はいはい、行こっか」

まずは他のメンバーと一緒に行くから、駅に集合だ。できれば二人で行きたかったけど、仲良しだし、一回言い始めたらても動かないのを知ってるから諦めた。

駅に着いたがみんなが見当たらない。こんな状態で見つけられるのが奇跡だと思うが・・

駅は人で埋め尽くされていた。まあ、夏休みの初日だしな。

とにかく見つけないと先に進めない。こんな時に携帯は便利だな。

隣で結織が俺の袖を掴んであたふたしている。かわいい。

いや、待て待て。今はそんなことに気を取られている場合じゃない。早く合流して電車に乗らなければ・・。

やっと、颯太の名前を見つけた。

「もしもし、颯太。今どこにいる？」

「あつ、伢！今駅にいるよ。人多すぎて大変だよー」

そんな範囲が広いと言われても・・。あいかわらずだ。

「俺達も駅にいたんだけど、人多すぎて探せないんだ。近くに目印

になるものない？」

「んーっと、切符売り場の近くにいる。」

「わかった。一回切るね。」

さて、どうやって進むか。こんな人ごみじゃ進みたい方向に進めやしない。

「結織、大丈夫か？人ごみ苦手だったよな？」

「大丈夫。冗にくっついてれば迷子にならないし。」

「手つなご。それなら俺からもつかめるし。」

俺たちは迷わないように人ごみをかき分けて進む。やつのことで颯太たちのところにたどり着いた。

「おーい、颯太ー！」

気づいたみたいだ。颯太が振り返った。

颯太っていうのは、親友。

かさざりそうた

風桐颯太。俺たちのムードメーカーみたいな存在だ。

颯太とは中学生のころから仲がいい。

その隣には華と焰がいる。

あやせはな

綾瀬華。同級生で、ひそかに颯太に片思いしてるらしい。俺達は知ってるけどな。

牙霧焰。^{さんぎりほむら}俺がいじめやらなんやらから助けた娘だ。胸もけっこう大きくてかわいい。もちろん、結核のほうがかわいいに決まっているが・・・。

俺達5人は仲良しって感じた。よくいろんなところに行く。

みんな集まったところですぐに改札に向かう。実はあまり時間が無い。

「みんな、走れ。」

電車が発車するギリギリで間に合った。よかった、次の目的地まで行く電車は1時間後だったから、乗り遅れたりなんかしたら大変だった。でも、間に合ったからこのことは忘れよう。

そのまま俺は座るとすぐに眠ってしまった。この後夢に見た、しかし現実では決して起きてほしくない事態に巻き込まれることを俺はまだ知らなかった・・・。

ブローグ（後書き）

定期的に書くことはできないと思いますので、気長にお待ちいただけるとうれしいです。

ご指導、ご指摘等ありましたら宜しくお願いします。

プロローグ2 異世界へ（前書き）

前話とほとんど日にちが変わりませんが二話目です。

本当は今回で異世界に行つて……つて話にしようと思ったのですが、思う様にいかなくてプロローグにしちゃいました。この中でも急いでしまったので本当にひどくなってしまったと思います。なにかありましたら教えていただけるとうれしいです。

プロローグ2 異世界へ

「・・・じ・・・おき・・・ 伢・・・起きて・・・ 伢！起きて！」

「んー・・・ああ・・・うう・・・」

「起きてよ！！伢！！！！もう着くよ。」

電車ですつと寝てたらしい。結織が覗き込んでいた。

「まったく、彼女が隣にいるのにずっと寝るなんて！」

「ごめん。後で埋め合わせするから。」

「そんなのいいけど、二人で来てたら私一人だったんだよ？」

ホントに怒っている。ここまでぐっすり寝るとは思わなかった・・・
。どうしようか。

「ホントにごめん・・・。」

「結織、こんなのと付き合ってた方がいいの？」

華が割り込んでくる。こんなのとは失礼な。それでも一応今までやったことないようなことをいろいろやってきたんだ。そこだけは認めてほしいが、今の状況は完全に俺が悪い。

「こんなんでも私の為にいろいろやってくれるからいいの。」

「ふーん、あたしは絶対付き合わないなー。」

やっぱり結織は優しい。今回はさすがに別れるのを覚悟した。絶対に埋め合わせしなければ・・・。

「そんなことどうでもいいからさっさと行こうぜ。俺のばあさんの家だったよな？」

颯太は俺の状況なんてお構いなしにどんどん進んでいく。今までそれに幾度となく助けられた。

「そうなんだけど、だいたいの場所しか覚えてないんだよ。ごめん・・。」

いつもは車で来ているからホントに知らない。今日はすごく謝っている。なんか嫌なことが起きそうだ。

「その兄ちゃん達、困ってるみたいだな。祭りに来たんだろ？まだ早いけどな。」

トラックから顔を出して声をかけてきた。ここら辺の人らしい。年は40くらいだろうか。助けてくれそうな雰囲気だし聞いてみるか。

「祭りの為に来たんですけど、ばあちゃんの家がどこにあるのかわからなくて。」

「そのあんたのばあちゃんってのは何て名前なんだ？」

名前か。確か朝・朝倉って名前だったか。名前は・・思い出せない。

「朝倉って名字だと思います。」

「ああ、朝倉さんか。乗ってけ、連れて行ってやる。ここからだ歩いて1時間くらいかかるぞ。」

そういえば、近くに駅なんてなかった。そんなにかかるのか。

「どうする？俺は乗せていってもらったほうがいいと思うんだけど。」

みんな少し悩んでいるみたいだ。

焰が口を開いた。

「私もお願いしてもらったほうがいいと思います。」

みんな頷いてる。

「それじゃあ、お願いしていいですか？」

「もちろんだ。荷台に乗ってくれ。」

車だと20分かった。俺の覚えてる家だ。

「ありがとうございます。」

「いって、三軒隣だし。」

と言っで行ってしまった。ホントに三軒隣の車庫にトラックを入れている。

「ばあちゃん、来たよ。」

ばあちゃんが出てきた。

「よく来たねえ。あんたたちが伢君の友達だね。さあお入り。」

俺たちは昼飯を済まして、夕方まで自由に過ごした

「早く行こうぜ。てか、先に行ってるな。」

先に着替えていた颯太と華と焰が先に行った。俺はまだ着替えてる結織を待っている。

「ごめん、お待たせ」

はつきり言わせてもらおう。これ以上かわいい娘はいない、断言する。

とは言わずに「行こ行こ」みたいな感じでさっさと家を出る。

思ったよりというか、村には不釣り合いなくらい人がいた。

「人多いね。でもここは涼しくて、気持ちいい。」

「ここは俺のお気に入り場所なんだ。こっちに来た時はいつも来る。」

俺と結織は少し外れて開けた場所に行った。俺のお気に入り場所だ。

そのまま結織と楽しく話していると、いきなり地面が光った。

「うわぁっ!」「きゃぁ!」

なんか俺だけ地面に引きずり込まれている。結織と手を離してしま
った。

「刃!待って!刃!」

そこで俺の意識は途切れた・・・。

プロローグ2 異世界へ（後書き）

次回はちゃんと異世界に行きます。

これからも読んで頂けるとうれしいです。

初戦（前書き）

ペースが速すぎるって自分でもわかっていきますけど、考え事したくないんで三つめです。

初戦

「世界を・・・世界を救って」

どこからか声が聞こえる。透き通ってて、ずっと聞いてても聞き飽きないような声だ。

今はそんなことどうでもいい。

世界を救う？俺が？そんなことできるわけがない。ただの高校生なんだから・・・。

「ひとつだけお聞きしますね。ジョブはどんなのがいいですか？」

なんだ、ゲームか。俺はゲームをやろうとしていたのか・・・でも、いつだろう・・・。

「どんな武器でも使えるやつで」

「はい！わかりました。それでは世界の行く末をお願いします。」

なんとなく答えた。前からそんなジョブがあればいいなって思ってた。

「あの、聞き——うわあああ」

急に目の前が真っ白になった。

「いててて・・・うっ」

コンクリートか何かの上にいるのかな？冷たいからそんなところだろう。

目を覚ますとそこには見たことない景色が広がっていた。見渡す限り空と木々と池、そして自分がいる神殿のようなもの。田舎にもこんなところはなかった。

「ここはどこなんだ？」

——カチャッ

起き上がろうとしていたら手に何かが当たった。それは・・・刀、日本刀だった。まず俺の持ち物じゃない。日本でこんなもの持ってたらずくに捕まる。

そんな詮索を続けていたら急に辺りがうるさくなってきた。だんだん目が慣れてきた。

——そこには俺の知らない生き物がたくさんいた。カエルに棘が生えている様なそんな感じ。で、そいつらはあきらかに俺を狙っている。こんな状態で死ぬのは嫌だ。

「死んでたまるか。俺は死なない。」

側に落ちていた刀に手をかける。すると、頭を言葉が過ぎった。

「我此処に在りし力を従へ仇為す者を微塵に砕く」

刀が光になって手首にくつつく。すぐに石のようなものが一つだけついた腕輪になる。

「あれ？あれ？どうすんの、これ」

俺は焦る。そりゃそうだ、敵がすぐそこに敵がいるのにいきなり武器が消えたんだ。

しかし、今度は名前のようなものが頭を過ぎる。できることはないのだから声に出してみる。

「風！」

腕についている石が粒子化して刀を形成する。腕輪はそのまま。

「よくわからないけど、やるしかない！」

刀を鞘から引き抜く。刀身は右手に、鞘は左手に持つ。俺のスタイルだ。

どっちにしろ敵はこっちに来るんだからこっちから出迎える。運動するのは久しぶりかもしれない・・・、いつもと違って生命がかかっているけど・・・。

「はあっ」

先頭の一体を袈裟懸けにする。切れ味半端ない・・・。

次は真一文字に刀を振る。三体を真つ二つにしたが、外したやつが突っ込んでくる。かわしきれない。

「ぐっ」

棘が横腹に突き刺さる。

もうダメだと思った。さすがに数が多すぎる。

——頭の中で何かが弾けた気がした。

次に見た時は敵が一面に転がっていた。その分自分がボロボロだったから、自分で全部やったんだろう。とにかく助かったみたい。手に入力入ると刀が粒子化して石に戻った。

「こうやって戻すのか。まだ全然わからない・・・。」

ここにいてもどうにもならないだろう。けっこうきついけど村みたいなのがあればいいなと思いながらしかたなく歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1961ba/>

神様に召喚されて勇者っぽくがんばってみた

2012年1月9日19時52分発行